

区長 それでは、時間となりましたので、平成28年度杉並区総合教育会議定例会を開会いたします。

総合教育会議は昨年4月に施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正に伴い、平成27年度から開催をしており、昨年5月の会議において決定した運営基準及び傍聴基準に従い進行してまいります。

既に何人かの方が傍聴にお見えになっていらっしゃると思いますが、会議につきましては、同法第1条の4第6項において、個人の秘密を保つために必要があるときなどのほかは公開となっておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、傍聴人から事前に撮影録音の希望がありましたら、これについて許可したいと思います。よろしいですね。

(異議無し、了承)

さて、議題に入る前に一言申し上げさせていただきます。

この総合教育会議のメンバーでございました馬場俊一教育委員が、4月12日にご逝去されました。馬場委員には平成24年から教育委員を務めていただいております。体調を崩されていたという話は聞いておりましたけれども、年齢的にまだまだお若かったので、回復をされ、今後も区の教育行政にご尽力をいただけるものと思っておりました。本当に残念でございます。謹んでお悔やみを申し上げますとともに心からご冥福をお祈りいたします。

また、4月14日から熊本県及び大分県で発生いたしました一連の地震は、余震がおさまることなく長期化・広域化の様相を呈しております。亡くなられた方にお悔やみを申し上げますとともに、被災され厳しい避難生活を送られている皆様にもお見舞いを申し上げます。区といたしまして、4月19日に熊本市に食料や飲料水などの救援物資を届けるなどの支援を行いまして、4月下旬には被災建物の判定員として建築職の職員を派遣いたしました。今後も5月中旬に罹災証明書の発行事務を行うための職員派遣を行う予定です。今後も引き続き被災地の復旧・復興に向けた支援を行ってまいりたいと思えます。

さて、本日の会議では2つの議題について協議をいたします。

1つ目は、平成27年度を取組と成果、2つ目は、平成28年度を取組についてでございます。次第の上では別々に審議することとしておりますけれども、27年度を取組を受けまして28年度を取組を行うというものでございますことから、一括して審議したほうが審議しやすいと思うわけでございますが、よろしいでしょうか。

(異議なし、了承)

区長 それでは、一括して審議をするということで、私と教育長からそれぞれ区長部局での取組と教育委員会での取組を平成27年度及び平成28年度について説明してまいりたいと思えます。

それでは、まず私から平成27年度と28年度の区取組について説明をいたします。

平成27年度は総合計画のステップに当たる第2段階の初年度であることから、一昨年度改定いたしました総合計画実行計画を着実に実施し、基本構想の実現に向けた取組を加速化させる重要な年でした。特に、区としては狭あい道路拡幅への取組、保育施設の

待機児童対策、特別養護老人ホームの整備、施設再編整備の推進などを大きな課題として取り組んでまいりました。また、静岡県南伊豆町での特別養護老人ホームの整備においては、建設・運営事業者及び建設・運営方針を決定するなど基本構想実現に向けた歩みを着実に進めてまいりました。

一方で、保育施設整備につきましては、待機児童対策緊急推進プランに基づいて待機児童解消に取り組んでまいりましたが、ご承知のとおり平成28年4月の待機児童数が昨年度より100名近く増加する結果となりまして、先月18日に行いました記者会見において、杉並保育緊急事態宣言を発表したところでございます。区は待機児童ゼロに向け、平成28年度中に当初の予定の倍となる約2,000名規模の保育施設整備を行います。

次に、平成28年度予算の考え方と教育分野に関する重点施策について説明いたします。委員の皆さんには既にご承知のことも多いと思いますが、改めてお話しをさせていただきます。

今年度は基本構想実現に向けた総合計画の折り返しの年度となることから、後半に向けて弾みをつけるべく実行計画や、まち・ひと・しごと創生総合戦略に掲げる事業を確実に実施してまいります。また平成28年度予算を「豊かさと安心を未来に広げる予算」と名づけまして、施設再編整備計画に基づく取組、要介護人口増への対応や少子化対策など長期最適、全体最適の観点から必要な取組を予算に反映させました。

減災対策等の充実による地域の安全・安心の拡大、多様な連携交流によるにぎわいの拡大、福祉のさらなる充実で区民生活の安心を拡大、次世代支援・教育の拡充、区民との双方向コミュニケーションの拡充という5つの視点に沿ってさまざまな施策を展開してまいります。

5つの視点のうち、教育分野に最も関連のある次世代支援・教育の拡充に向けた取組といたしまして、仮称就学前教育支援センターの整備に着手して、就学前教育施設における幼児教育の質の向上を図ること。学校教育に関しては、小学校における特別支援教室の段階的設置を進めるとともに、小・中学校副校長の校務遂行を支援する人材配置や中学校の部活動活性化事業を本格実施するなど学校経営を支援する区独自の取組を充実・強化すること。生涯学習スポーツ分野では世代を超えて科学に親しみ、学ぶことのできる次世代型の科学教育事業を引き続き推進すること。また、10月には妙正寺体育館をリニューアルオープンするとともに屋外ビーチコートを併設する永福体育館の移転改修工事に着手すること。これらの施策を重点施策として28年度予算に盛り込んでおります。

区は、住民に最も身近な基礎自治体として区民の生活をしっかりと支えていくため長期的な展望を持ち、特に重要な課題等に関しては国や東京都に先駆けて施策事業を展開するという気概を持って区政運営に臨み、区民が豊かさと安心を確かなものとして実感し、未来にわたって希望が持てるようにとの思いを込めて予算を編成してまいりました。教育委員会におかれましても、このような考え方についてぜひご理解をいただいた上で、基本構想及び教育ビジョンの実現に向け、教育行政運営に取り組んでいただきたいと思います。

最後に、教育委員会と連携して行わなければならない重点課題でございます。杉並第

一小学校等複合施設整備について、私の考えをお伝えしたいと思います。

こちらの中長期的な展望に基づいて実施していくものであります。杉一小の複合化につきましては、区立施設再編整備計画第1次実施プランにおいて計画化し、懇談会等の意見も踏まえて平成28年4月に複合施設整備にかかわる基本構想、基本計画を策定いたしました。

この計画は、老朽改築にあわせまして現杉並第一小学校の地に、杉並第一小学校と学童クラブ事業、小学生の放課後等居場所事業といった従来より区立小学校で行ってきた機能に、阿佐ヶ谷地域区民地域センターと産業商工会館のいわゆる区民施設の機能を複合化するものでございます。

施設の整備方針として、学校施設としては杉一小の持つ杉並区内で最も長い歴史と伝統を継承・発展させるとともに、地域の教育力に支えられた特色ある教育活動を踏まえながら将来を見据えた教育環境の向上を図ることとし、多様な教育に対応できる学習環境の整備や安全・安心で快適に過ごせる学習生活空間の整備、また地域に開かれた学校づくりを行うこととしております。

区民施設としては、阿佐ヶ谷地域の新たな学び、交流・文化の拠点として多世代の人々が自主的に集い交流し、地域の活性化と区内産業の発展、まちの文化の振興を図ることとし、新たな活動を生み出す地域コミュニティの拠点及び阿佐ヶ谷の魅力を発信する地域文化の拠点とすること、また、にぎわいと商機を創出する産業振興の拠点として整備するものとしております。

また、杉一小の複合化については、施設再編整備計画における重要な一里塚になると認識しております。阿佐ヶ谷駅前という立地条件において、まちのにぎわいを創出する阿佐ヶ谷のまちづくりにおけるシンボルに育てていくことを念頭に置いております。

しかしながら、まだロードマップができ上がったばかりの段階でございますから、これから教育委員会と一体となって取り組んでいかなければ実現できないものと強く認識をいたしております。平成33年度の運営開始へ向けて引き続き教育委員会と協力し、取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

私からの説明は以上とさせていただきます。

さて、次に、教育委員会の平成27年度の実績と成果及び28年度の実績について伺いたいと思っております。平成27年度教育分野においては情報教育の推進、幼保小の連携の実績などを予算に盛り込み、重点的に取り組むべきものとしてまいりました。その成果等も含めてお話ししたいと思っております。

それでは、教育長、よろしく願いいたします。

教育長 それでは、私から教育委員会の平成27年度の実績と成果及び平成28年度の実績についてご説明をいたします。

パワーポイントの資料を使って説明いたします。

昨年の総合教育会議で教育ビジョン2012「共に学び共に支え共に創る杉並の教育」を杉並区の大綱として認めるという決定がされました。それに基づきまして、この教育ビジョン2012の推進計画のさまざまな施策を展開してきたわけです。

平成27年度末までの実績について、概要をご説明いたします。

四半期ごとに分けてございますが、ご承知のように、昨年、年度当初、一番大きかったことは、杉並和泉学園の開校でございます。杉並区最初の施設一体型小中一貫教育校、約10年間の準備をし、地域の方々と協議を積み重ね、さまざまな知見を盛り込んだ教育施設として開校することができました。今年の4月には校庭の芝生も十分根づいて外溝工事も完成し、新年度に入って新しい1年生が芝生の上で転げ回ったり駆け回ったりしながら楽しく過ごしている様子なども見るできるようになりました。

また、中学生が倍増、倍増といった形で生徒数の増加を見ることができ、今年度の中学1年、和泉学園では7年生、第7学年と呼んでおりますが、2学級を確保することができました。この間長いこと単学級で少人数のそういったデメリットを感じていた学校ではありますが、生徒増ということで大変な活気を回復することができたことは大変喜ばしいことというふうに考えております。

それから、計画事業ですので、その計画に従って行ってきたわけですがけれども、教育ビジョン2012の推進計画の改定、それから高井戸第四小学校に新しく特別支援学級を開設いたしました。これはことばの教室と情緒障害の教室を併設して、杉並南西部の教育需要に応えるために新たに開設したものでございます。

それから第2四半期の主なものは、いじめ防止対策推進基本方針を策定したことと、7月の末に中学生生徒会サミット第3回を行いました。3年目の今年は、いじめをなくすために自分たちでできることはどんなことか。ただ、いじめをなくそうということだけではなくて、それぞれができることを考えて実行していこうということで大変大きな成果をおさめることができたというふうに考えております。

また、宮前図書館の施設を活用して中学生適応指導教室のさざんかステップアップを開設いたしました。それから、様々な区民行事や地域行事の機会を捉えて、生涯学習としての科学教育を行うことを開始したわけですがけれども、ここに書かれておりますようにフューチャーサイエンスクラブ、中学生を対象とした科学教育を開始いたしました。

それから第3四半期には次世代型科学教育の拠点づくりに関する調査報告書を受け取り、今後どういった拠点づくりをしていくのかという事業に取り組む端緒ができたところとあります。

また、年末には杉並教育シンポジウムを開催いたしました。これはこの間ずっと取り組んできていることですがけれども、この後また触れますけれども、中教審等の答申等で指摘されております地域に開かれた学校、地域とともにある学校、そういったことをより一層進めていく、この間杉並区が続けてきました「いいまちはいい学校を育てる～学校づくりはまちづくり」こういった考えで進めてきた様々な事業をここでもう一遍振り返り、学校支援本部を設置いたしました10年がたったこれを契機にもう一度振り返って次の展望、次の10年を展望する機会を持ちたいということで大変な盛況で様々な意見を交換し、次の10年を展望することができました。

最後の四半期には、高円寺地域の小中一貫教育校に向けた基本計画を策定したということ。そして、つい先だって特別展を開催いたしました荻外荘が国の史跡として指定をされました。この間さまざまな方面と関係調整を進めて、歴史的な意義ある施設として指定されたことは大変喜ばしいことと考えます。今後は、こうした史跡等を活用した区

民の学習の機会あるいはさまざまな文化的な取組に活用していくことができれば、より一層意義の深いものになっていくものと考えます。

そして、3月の最後に長いこと親しんできました科学館の閉館を迎えました。科学館は閉館されたわけですがけれども、近い将来、新たな科学教育の拠点をつくることを目指して取り組み、こういった経験やさまざまなノウハウを継承・発展させていくことができるといふふうに考えております。

以上、平成27年度の内容についてお話しをいたしました。その中で区長のお話の中にもありましたICTに関して若干の補足説明をしておきます。

教育委員会ではICTの環境をこの間、整備を続けてきたわけですがけれども、その大きなものに各学校の全普通教室に電子黒板機能付きプロジェクターを配置し、活用しております。これによってデジタル教材の活用が大変便利になりました。ご承知のように、近々デジタル教科書が法定化され、それに伴って学校のWi-Fi環境も国の補助によって整備されるという情報が流れております。そういった国の取組に先立って杉並区としては、この間先見性のある事業としてICT環境の整備を進め、特に特別支援教育へのタブレット端末を配備することによって、特別に支援を要する発達障害等さまざまな障害を持った児童生徒の教育が一層可能性を広げていくことができたという知見も得ております。今後さらにこういった環境の整備に力を入れていく必要があるかと思えます。

また、もう一方、児童・生徒が使用するデジタル機器に対して校務システムを改善する仕組みとしてスクールオフィスの導入であるとか、あるいは学校でのインターネット利用であるとか、あるいは学校間のネットワークであるとか、こういったことを区と学校との間のネットワークも含めて整備をして、いわゆるペーパー文書からデジタル型のデータの交換が簡単にできるようにすることによって校務の効率化を図ってきたところでございます。恐らく今後こういった方向はさらに進められる必要に迫られているわけですし、予算的にもかなり必要とするものですが、21世紀半ばに向けて、こういった科学技術を活用したICT環境の整備についても取り組んでまいりたいと考えております。

幾つか具体的な情報について触れておきたいのですが、誰もが興味と関心を持つ学力ですがけれども、杉並区では国が行う学力調査と、それから東京都が行う学力調査、そして区が独自に児童・生徒が当面している課題について、その達成度や理解度を調べる調査と、3つの学力調査を行っておりますが、それが1つの学年に集中することがないように、例えば国の学力調査は最高学年である6年と中学3年といった形に振り分けて、特定の学年に負担がかからないような工夫をしながら、さまざまな角度から児童・生徒の学力あるいは到達度を調査し、問題の所在を明らかにしております。

ここに出されている資料は、主として測定が比較的可能な知識の部分、これに対してBという問題があつて、こっちは活用であるとか考え方であるとかといったものになるわけですがけれども、国の学力調査で行っているうちのAの部分、主として知識の部分についての集計がこういう形になります。緑が杉並区、赤が東京都、紫が全国。

これを見ておわかりいただけるように80点、この80点というのは、実はよくいろいろな会議とか議論の場で成績、成績という言葉が使われますけれども、これは成績ではご

ざいませぬ。例え、よくテストのときには問いの1の問題は5点とか文章題は10点とかという得点が配点されているわけですけれども、これはそうではなくて、全ての問題の中でどれだけできたかということですから、点数にウェイトはかかっておりませぬ。ですから、できたかできないかということを中心に集計したもので、そういう観点からすれば、国語の、小学校でしたら約8割5分に近い理解度・達成度を示しているということが言えます。

こうしてみますと中学3年の数学というのは、かなり差が開いてくるところがありまして、そのときの問題の難易度によってばらつきが出るわけですけれども、いずれにしても7割以上は達成しているということからすれば、この間の取組について、今後この状況を維持し、さらに高めていくという、そんな方向に過ちはなからうというふうに考えております。

それから、その反対側と言いますか、一緒に議論されることの1つに体力がありますが、いつか話題になりました体力の低下、全国的にはこのところV字回復なんていう報告がされておりますけれども、杉並区の場合には、こういった状況です。これは決して私は高いとは言えないというふうに、あえて厳しく見たいと思ひます。むしろ、まだまだ日常の生活を改善することによって基本的な体力を高めていくことができるだろう。ただ、体力を高めるために特別な取組をするということとはあまり意味のあることではありませぬので、朝食をしっかり食べて学校でしっかり体を動かす、あるいは夕食後、適切な時間に就寝して睡眠を十分とるといった生活習慣を確立していく、そして適当な、必要な運動を確保していくという、そういったことで基本的な体力は維持・向上されていくものというふうに考えております。できれば丈夫な子どもたちに育ってもらいたいと思ひておりますので、こういった点にも意を用いていきたいと思ひます。

さて、教育ビジョン2012のちょうど折り返し点に到達をいたしました。ごらんのように、24、25、26、27、28、前半の5年間で今年度で終わろうとしております。第1期を前半3年間、第2期を来年度までの3年間というふうに割り返すこともできますが、いずれにしても来年度以降後半に入るわけです。杉並区の総合計画等とタイアップして一層教育の充実に取り組んでいく必要があるというふうに考えます。

そこに「国をリードする杉並の取組」というふうにあえて書いておきました。実は、昨年の12月の末に新しい教育のあり方あるいは学校のあり方や教員養成等に絡んで3本の中教審の答申が出されたわけですけれども、そういった答申の中に部活動の活性化であるとか、あるいはこの後触れます学校支援本部であるとか、杉並区がこの間、5年あるいは10年という年月を費やして取り組んできた成果が大幅に反映されております。そういったことも含めながら、これまで取り組んできたことを評価し、さらに次の5年に向けて準備をし、我々が求める成果を実現していきたいというふうに考えております。

今年度は区立小中学校に副校長の校務支援員を配置いたしました。今、学校が抱えている課題の大きなものの1つに、子どもの成長に関するさまざまな変化、あるいは地域・保護者からの要望、あるいは教員自身の資質・能力の問題、いろいろなことが言えるわけですけれども、まとめて言えば学校が状況に十分対応し切れていないということも事実です。そういったことをどう改善していくか、総合的に取り組んでいく必要があります。

すが、今年度まず第1弾として小中学校の副校長の支援員を配置し、改善を図っていき
たいというところがございます。また全小学校に3年計画で特別支援教室を設置して、
情緒等発達課題を持つ子どもたちが十分な教育を受けることができるような環境を整え
ていきたいと、その第1年目を迎えたところでございます。

今、昨年の暮れに3本の中教審の答申が出されたというふうにお話しをしましたが、
実はそれは大変長い名前の答申でありまして、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向
けた学校と地域の連携・協働のあり方と今後の推進方策について」というものが1つ。
それから「チームとしての学校のあり方と今後の改善方策について」というのが1つ。
それから「これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上について」という3本が
あるのですが、この中で今、議論され、具体化に向けて取り組まれていることの1つに、
チーム学校構想というのがございます。唐突に出てきた言葉で、なかなか理解がされて
いないところですが、要は学校が先生だけの組織ではなくて、さまざまな専門性を持
ったスタッフと協働して学校全体の総合的な力を高めていくためにはどうしていったら
いかということが最大の論点になっております。

今、杉並では、杉並の学校を支える仕組みとして絵(スライド)に描いてありますが、
上から、もちろん校長はおりますけれども、地域運営学校、学校支援本部、部活動支援、
外部指導員、PTA、学校ボランティア、通学安全指導、SSW、調理業務の委託や様々
なことを、もちろん学校の図書館には学校司書を配置しておりますが、こういった校長
と先生によってだけ単独で構成されている学校を様々な専門職種とコラボレーションす
ることによって、より課題対応力、教育力を高めていこうというものです。

そのことを考えてみますと、そこに書いてありますように、既に杉並区は取り組んで
きていることはたくさんあります。指導教授、理科支援員、SSW、SC、こういった
ものは既に全国に先んじて配置しておりますし、今後こういった専門職種との連携、
あるいは必要であれば学校と地域の間で発生した教員では理解あるいは解決することが
難しい法的な内容を含んだ事案であるとか、あるいは専門的な会計であるとか、そうい
ったものももし発生するとすれば、当然法曹界あるいは会計士や税理士といったような専
門技能を持った方の力も必要になってくる場面もないわけではありませぬので、そんな
ことも含めてあり方を構想し、具体的なものを検討していくときが来ているというふう
に考えております。

実は、東京都から、昨日内々にこういったことを進めるために、ぜひ杉並区が今やっ
ている平成17年以降の取組について説明してもらいたいという依頼がありましたので、
今こんなふうに学校支援本部を置き、学校司書を配置し、30人程度の学級編制を独自に
行ったり、こんなことをやっているという説明をしたところでございます。今後、一層
学校の教育活動を充実させていくためにこういったことを検討して、より実行性のある
組織をつくっていききたいというふうに思います。

それでは最後に、28年度の主要課題についてご説明をいたします。

4つの柱があります。最初の柱は「子どもの豊かな人間性を育てる質の高い学校づく
りを進めます」。小中一貫教育を進めてきて一体型の学校も設置されたところですが、第
2番手の学校として高円寺地区の学校の今、計画を進めているところですが、指導内容、

方法、カリキュラムにつきましては、この間、国語、算数（数学）、そして英語ができました。今年度は総合的な学習についてカリキュラムの開発を行い、現場で使えるような形に進めていきたいと考えております。また、ICT化の促進、それから部活動の活性化、専門家に外部委託をしていくこと、それから先ほど触れました副校長の校務支援、そして特別支援教育の充実。

それから2つ目の柱「家庭、地域、学校のつながりを重視したともに支える教育を進めます」というのは、既に説明をいたしましたけれども、この間杉並区が取り組んできた「いいまちがいい学校を育てる」という基本理念に基づいて学校支援本部あるいは地域運営学校の指定を拡大して地域に開かれ、地域とともにある学校、地域と手を携えて子どもを育てていくことができる学校づくりをさらに進めてまいりたいと考えております。

それから3本目の柱は「地域とともに歩む『新たな公共空間』としての教育基盤」。先ほど区長から説明がございました、学校だけ単独でということではなくて、時代の要求あるいは地域の要望、あるいは全体的な施策を進めていく上でさまざまな機能を学校に併設して新しい公共空間をつくっていく必要があるという考え方から、杉並第一小学校の改築・複合化、現在あの狭い校庭を1.5倍の広さに広げ、子どもの活動を十分なものにしていくためにはどうしたらいいかということで、屋上を校庭にすることによって広い校庭を確保するという計画も出されておまして、今後、阿佐ヶ谷北側の新たなランドマークとしての公共空間ができ上がっていくものと考えます。あわせて桃井第二小学校の改築を進めます。そして平成31年の開設をめどに高円寺地域の施設一体型の中高一貫教育校の整備を進めてまいります。

最後に4番目の柱ですが、「生涯にわたる豊かな学びや文化、スポーツ活動を通じ、誰もが輝く地域づくりを進めます」というテーマですが、今年はオリンピックイヤーです。そして4年後には東京オリンピックがやっております。現在計画をしている屋外のビーチコートを整備して、そこでビーチバレーの大会であるとか、あるいはバレーに使わないときには砂の上での歩行やさまざまな運動など多様な使い方ができる国際規格の屋外ビーチコートを設置すること、あるいは次世代型の科学教育の拠点づくり、あるいは実際にこういったものを出勤授業や科学博覧会等のような事業展開、そういったことを進めて豊かな生涯学習、豊かな文化、豊かな学び、そういったものの充実に努めてまいりたいと計画をしているところでございます。

昨年度の評価と今年度の計画等につきまして、私からの説明は以上です。

区長 ありがとうございます。27年度の進捗状況と28年度を取組ということで教育長からご説明をいただきましたが、教育委員会のこれまでの成果については区として高く評価をいたしております。

また教育長のお話にございましたが、学校のICT、インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジーという事ですが、ICTについては機器の導入が順調に進んでおまして、ICT機器を活用した教育環境が整いつつあると感じております。今後は、より効果的・効率的な活用に向けましてICT機器の活用方法等を教育委員会において十分に議論していただきたいと思っております。その上で今年度改定を予定しております

実行計画の見直しにも反映させ、着実に進めていただきたいと思いますと考えております。

また本年4月から障害者差別解消法が施行され、全ての区職員は障害を理由とする不当な差別的取り扱いをしてはならないこと、さらに事務事業を行うに当たりまして障害者に対する合理的な配慮をしなければならないこととされております。このことに伴い、区長部局では3月に職員対応要領及びマニュアルを作成し、これらの対応の徹底を図っておりますが、学校現場の取組も着実に進めてもらいたいと思います。

教育長から補足がありましたらお願いします。

教育長 今、ICTの環境整備についてのお話をし、区長からも今後の方向性について指示をいただいたわけですが、実はICT、何でITがICTになってきたかというのをよく言われるのですが、まさに今、インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー、人と人をつなぐ道具として非常に有効、また人と人だけではなくて人と社会、社会と社会、そういったつながりをより強めていく道具として非常に有効であるということは、言を待つまでもないのですけれども、今後そういったことはさらに進んでいくというふうに考えます。

何年か前に、もう10年もすると現在ある職業の半分ぐらいは消えてなくなるだろうという指摘がありました。言い方は違う方法もあって、今ついている職業にそのままついている人は半分ぐらいになるだろうという言い方をする場合もありますけれども、いずれにしても働き方とか生き方が大幅に変わっていく原因の1つにICTあるいはAIの人工知能の発展があることは、それはもう大方理解できるころだろうと思います。

ただ、その中で学校はなくなるならない。人が人を育てるという行いは、学校は主としてそういうことをやっているわけですが、どんなに科学技術が進んでも人が人を育てるという営みは決してなくなるならない。そうすると、先生の仕事もなくなるならない。ただ、その仕事の中身は多分大幅に変わっていくだろう。そう考えたときに、その1つの契機になるのはICT機器になるだろうというふうに考えております。ですから、子どもたちの学びを一層拡大し、可能性を広げていくためにも今後この環境整備を推進していきたいというふうに考えておりますけれども、今年度は実行計画の改定も予定されておりますので、より効果的・効率的な活用のために十分議論をしながら進めてまいりたいというふうに考えております。

また、ご指摘の障害者差別解消法の施行に伴う対応でございますが、本年3月末に東京都教育委員会から都立学校向けのマニュアル等が示されたことを受けまして、区立学校における対応要領及びマニュアルの策定を進めております。6月上旬には取りまとめて研修等を通して改めて学校の教職員への周知徹底を図る考えです。こうした障害者の権利、利益を尊重した対応は学校におけるいじめ防止対策にも通じる重要な取組でありますので、教育委員会としてもしっかり取り組んでまいり所存です。

なお、いじめ防止対策につきましては、昨年8月にいじめ防止対策推進基本方針を策定して各学校と連携を図りながら進めているところですが、今年度は、この方針を踏まえて、いじめ対応マニュアルの抜本的な改定を予定しております。これも6月を目途にまとめて障害者差別解消法の取組と合わせて総合的・一体的に対応を図ってまいりたいと考えております。

区長 ありがとうございます。

さて「その他」ということで、これまで私と教育長から27年度、28年度の取組について説明をしてまいりましたが、ほかの教育委員の皆さんからも27年度、28年度の取組等についてお話しいただきたいと思います。また、区と教育委員会が共有すべき課題などもございましたら、お聞かせいただければと思いますので、お1人ずつ順番にお話をいただきたいと思います。

對馬委員からお願いします。

對馬委員 では、私からは課題と言いますか、日ごろ学校を訪問しておりまして感じたことなどを少しお話ししたいと思います。教育長のお話と重なることもあるかと思えます。

例えば、今、区長からもお話があったICTの授業などというのは非常にやっぱり日常的に行われている学校がふえてきたと感じております。低学年だったと思いますが、「この葉っぱは誰が食べたものでしょう」みたいなので、ウサギとかキリンとかは教科書に出ている写真を見てもわかるのですけれども、モモンガって写真じゃなかなか小さい子たちはわからないのが、そこにクリックすると、そのモモンガが飛ぶ姿とかが映ると「ああ、だから上のほうのものを食べるんだね」みたいな、すごく簡単に納得できるような授業というのが電子黒板で電子教科書をちょっとクリックすればできると、非常に有効に使われているなと感じました。

それから6年生の自習のときに各自がタブレットを持っていまして、恐らく先生がそれぞれ自分の課題をやりなさいということを残して出張か何かに出られたのだと思いますが、計算問題をタブレットでやっている子もいれば、作文を普通に書いている子もいれば、本を読んでいる子もいればという中で、非常に日常的にタブレットを使って、私たちの時代にそういうのはありませんから、ともすればそんなものを与えたら遊んでしまうのではないだろうか、ゲームでもしたくなるのではないだろうかちょっと思ったりもしていたのですが、そうではなくて普通に計算問題のような学習のツールとしてきちんと使っている姿を見たこともございます。

特別支援学級においても、それぞれやっぱり少しずつできることが異なる中で、タブレットですと、この子は足し算とか、この子は掛け算をやっているとか、この子は書き順、平仮名の練習をしているとか、そういったのが同時にできておりまして、非常に有効に使われているなと感じました。やはり非常に有効に使っていただければいいなど。先生方も今までと違う研修をたくさんされなければいけないとは思いますが、やはり今からの時代に生きていく子どもたちにとって、とても大事なツールになってくると思いますので、ぜひこれはこのままいい形で進んだらいいと思っております。

それからもう1つ、科学の部分になりますが、学校にプラネタリウムが来ている授業も拝見させていただきました。まず体育館をあけたときに大きなプラネタリウムのドームがあって子どもたちはその時点で「おお、すげえ」という声が上がって、その中に入って授業をするということで、理科の授業の1こまの中のほんの短い時間ですが、やっぱり異空間で専門の方に授業をしていただけるというのは非常に有効な、時間的なロスもありませんし、とても日常の中に異空間があるからこそ楽しめるというか、そういう感じが大変いたしました。

それから3月でしたか、2月でしたか、サイエンスフェスタのときには同じドームを使って今度は中学生が、来場者に対してプラネタリウムの説明をするというのも拝見いたしました。なかなか中学生の力というのもすばらしいものがあるなと思いました。いろいろなものを、今までのプラネタリウムだとなかなかそういうことができなかつたということですので、やっぱり新しい形にして新しいいろいろ力を発揮したり、子どもの力を伸ばすきっかけになるというのは大変いい取組だと思っております。ぜひこれからもそういった新しい技術に、ただ飛びつくとかいうだけでなく、やっぱりきちんとそれを検証しながら有効に使っていくような教育が展開されるといいなと感じております。微力ではございますが、頑張りたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

区長 伊井委員お願いします。

伊井委員 今、ご紹介いただきました教育委員の伊井でございます。着席したままで失礼いたします。

教育委員を拝命してから1年半がたちました。この間、研究発表、それから周年行事、卒業式、運動会などさまざまな場面で学校へ伺う機会をいただきました。多くの場面で地域の方々からすごく温かいまなざしと子どもたちを応援する拍手に喜びとともにほっとする気持ちをその場で感じるということが多々ございました。子どもたちは、こうした多くの方々に支えられていることを実感して私自身も本当にありがたいと感じております。

また、昨年開催されましたサイエンスフェスタでは専門家の方々の指導のもと子どもたちが目を輝かせていろいろな実験等に取り組む姿を目の当たりにすることができました。杉並区では、ほかに先駆けて、先ほど教育長のほうからも大変詳細にご説明ございましたが、学校支援本部が10年を迎え、全校に設置されており、また多くの地域の方々のご協力をいただきながら、さらに専門家の方も取り入れての事業が実施されてたくさんの成果を得ていると思っております。10年間の振り返りも行われておりまして、これも一定の成果を得ていると伺っております。現在、学校運営協議会の設置も進んでおりますので、このCSと、それから学校支援本部がさらに連携を図り、地域との協働が子どもたちの学びに対して効果的につながっていけばいいなと考えています。

その中で1つ思うことがあるのですけれども、CSの設置とか学校支援本部の力量につきましても、地域により、また学校により環境が異なる現状があるかと思っております。その点は、ぜひ担当の方々によき相談相手になっていただき、学校を支援してくださる方々をさらに支援することにおいても、ぜひ区の方々にご活躍いただきたく願いますところですので、それにより双方向の交流も生まれるのではないかなと思っております。

さらに小中連携だけにとどまらない、例えばいい取組が1つの学校であって、それが定着したら、次にはそれを広げる展開があってもいいのかなと感じております。今、小中一貫教育が大変進んできていますけれども、小中、それから中中という、小学校・小学校、中学校・中学校でのという連携や交流も、難しい点はあるかと思っておりますけれども、次の可能性へのチャレンジとしてはすごく有効なのではないかと考えています。

また、1つ地域と位置づけられる保護者の方々となのですけれども、私がPTAをさ

せていただいたころよりは、今回お仕事をしている保護者の方々のために積極的に待機児童に対する取組を行っていただいておりますけれども、やはりそういった仕事をする保護者の方々が多くなると、どうしてもPTAや何かの参加率が下がります。いろいろな形、いい形で参加していただけるといいのですけれども、ご理解をもっといただく形で学校の方針とか、それから今取り組んでいることとかを、いい形で協力して次の時代を担う保護者の方々に、次の時代を担う地域となっていただけならいいなと願っております。

ここのところ胸の痛む事件や事故の報道、それから熊本の地震に際しましても、子どもたちの大切な命に思いをはせることがたびたびありました。健やかな子どもたちの成長を願いながら自分にできることを考えながら、また皆様と協力しながら進んでいきたいと思っております。よろしく願いいたします。

区長 折井委員お願いします。

折井委員 ご紹介いただきました教育委員の折井麻美子でございます。着席したままで失礼いたします。

昨年度は大学教員としての立場から英語教員の研修というお話をさせていただいたのですけれども、今年は小学校の保護者となって1年と少しがたちましたので、保護者として、どのような感想を持っているかというところをお話しさせていただきたいというふうに思っています。

まず最初に、子ども読書活動推進計画、区では学校司書の配置が24年度に全校で完了しております、各教科での教育活動での活用ですとか、読書をする習慣をつけてもらいたいということで先生方、ご努力くださっていると思うのですけれども、その様子が定例会等で報告されることもたびたびあるのですが、保護者の立場からもその効果を実感することがございます。

お恥ずかしながら、うちの小学校2年生の息子は、とにかく外で遊んでいたい、室内にいるときには、ひたすらレゴをやり続けるという子どもでして、絵本にもあまり興味を示さない子どもです。寝る前の読み聞かせに関しては、自分の好きな幾つかの車に関する本をローテーションで読んでもらうというのが常で、新しい本に対して少しアレルギーを持つような子どもでございました。

それが小学校に入りまして教育活動の中で週に1回、学校の図書館から本を借りてくるという活動がございまして、区からいただいている緑色の大きな袋を抱えて3冊借りて帰ってくるのですけれども、初めの4月、5月、6月くらいまでは本当に借りてくるだけで、とても本人では読めないような難しいような本を自分はこれが借りたいのだということで借りてきたり、もしくは放っておいてあまり読まない。とにかく読み聞かせでもらうだけということが続いていたのですけれども、徐々に司書の先生ですとか担任の先生がいろいろと導いてくださったようで、少しずつ新しい本に興味を示したり、もしくはいろいろなジャンルの本を借りてくるようになりました。少しずつ自分でも字が読めるようになってまいりましたので、自分で本を読む機会もふえてまいりまして、最近では学校で本を借りてくるだけでは足りないので、週に一度か2週に一度、地元の図書館に親が連れて行って本を借りてくるのですけれども、徐々に徐々にではござい

すけれども、自分で本を読む、そして新しいものに意欲的に興味を示して読みたいという意欲が高まっているのだなというふうに思っています。今はお風呂上がりには、ちょっと待っている間、自分が選んできた本を読む時間というふうに読書が生活の中に習慣づけられてきたかなというふうに思っています。

学校で最初借りてくるというところがもしなければ、恐らく地元の図書館に行くのも少しハードルが高かったのかなと。最初はあまり興味を示さないことは、子どもでするのであるとは思いますが、学校のほうで少しずつ働きかけをしてくださること、それを継続することによって少しずつ本が身近なものとして感じられてきているのではないかなというふうに思います。

読書活動というのは、正直申しまして学力よりもちょっとインパクトの弱いというか、少し目立たない活動のように見られるようなことも、もしかするとあるかもしれないのですが、本を読む力というのは豊かな人間性を育てる礎になってくれるもので、学力の本当に基礎になるものだと思いますので、ぜひ図書館の関係者の方々、そして学校の司書の先生方、そして学校全体で読書活動をさらに推進していただくと本好きの子どもがさらにふえていくのではないかなというふうに感じています。

もう1つが、幼保小連携なのですけれども、うちの息子は保育園の出身なのですが、教育委員会では幼保小連携ということを知ってよくわかっていたつもりだったのですが、正直申しまして保護者の立場からすると何をしてくれているのかなというのはいささか見えてこなかった部分がありました。それが今度は小学校に上がって小学校側から見る機会が幾度かございまして、そうすると、小学生が少しお兄ちゃん、お姉ちゃんになるので、ちっちゃな保育園だとか、子供園のお子さんに対して何かいろいろな工作をしたり歌を練習したりというような活動をしている姿を子どもを通じてですとか学校だよりを通じて触れる機会が多くなりました。

なので、1つ思うのは、例えば小中連携ですとか、そういった連携というのは、下のほうにいるときには意外に気がつかなかったりすることもあるのかなと。連携されるほうになってみると、先生がいろいろと活動をセッティングして下さって、様々な準備をしている姿を見て、楽しみにしている姿を見ると、これは本当にちっちゃなお子さんにとってよいだけではなくて、上の大きいお子さんにとってとても非常に有効な活動なのではないかなというふうに実感しております。

また地域の方々との接する機会も、やはり小学校になりますと少しずつ多くなってまいりまして、PTAの活動はもちろんあるのですが、各種活動において現役のお父さん、お母さんだけではとてもできない、ノウハウを持って強力的にサポートして下さるPTAのOBもしくは地域の方々が何年、何十年にもわたって助けてくださっている様子を知ることができました。例えば、お餅つき1つとってみても、物を貸し出してくださったり火をおこすなど、難しいところを全部やってくさるといったような形で本当に大きなご支援をいただいているのだなということが、保護者の立場になって実感しているところがございます。これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

区長 どうも貴重なご意見等をありがとうございました。

皆さんのお話を伺って、私も教育の現場のことはあまり詳しくないですけども、確かにICTが発達してきて非常に便利な世の中になっているということは、日常私たちがいろいろな場面で感じるわけですよ。ただ、例えば私たちは子どものころはまだパソコンもないし、ワープロもないという時代ですね。今はみんなパソコンで文章、手紙も書けるでしょう。どうなのですかね、例えば字が下手な人が増えたとか、あるいは変わらないとか、何かそういう統計や傾向などがありますかね。

教育長 30年ぐらい前に、ちょうど昭和50年の前半から後半にかけて、学校にコンピュータが1台とか入り始めたころ、そのころ、私はたまたま済美教育研究所とっていた時期に、そこでコンピュータと教育の関係、学習の関係を専ら専門とする研究をやっていたんですけども、そこでいつも議論になったのは、ワープロを使うと字を覚えなくなる、コンピュータが子どもを教えるなんてあり得ない。もっと言えば、かつて戦後、大宅壮一が「テレビが普及すると1億総白痴化する」と言った、あれに似たような議論があったのを思い出します。

それはいい意味では全くそのとおりで、手で書いて入力しなければ、当然書く機会がなくなって文字を覚えることもなくなる、機会が少なくなるし、本来人間が触ったり人の温かさとか、そういった感情も踏まえて子どもを育てていくということを簡単にコンピュータに任せたらうまくいくはずがないというのは、これは当たり前の話で、そのとおりなのですけれども、一方で、だからワープロなんかやる必要ないとか、コンピュータは扱ってはいけないという議論がだんだん消えていった背景は、やっぱり便利なのですね。コンピュータがコンピュータの形をしていなかったりしている場面というのは世の中にいっぱいあるわけで、駅で切符を買うにしても缶ジュースを買うにしても後ろにはコンピュータがあるし、家庭の電子レンジでチンするときには何がコントロールしているかという、コンピュータがコントロールしているわけですね。コンピュータの形をしていないコンピュータというのはもう身近にいっぱいありますから、もはやそこから抜け出すことはできないのですけれども、一等最初に指摘された、やっぱり鉛筆でノートに字を書かないと字を覚えなくなるよというのは、私は当たっていると思います。それから筆を持って墨をつけて文字を書くというのも大事だと思います。ですから、ワープロでやれば便利だから、コンピュータでやれば便利だからということですぐそれだけになるのではなくて、やっぱり手に鉛筆を持って文字を丁寧に書く、それから時間や心のゆとりを持って墨をすって、筆で字を書くといったことを大事にしていく必要があると思います。

あるメーカーが、キーボードで入力するとまさに字を覚えなくなってしまうので、画面に書いて入力するというところの手書き入力というやつですね、これはいつときかなり研究しているところまでいったのですが、あまりにも手間暇がかかるものですから頓挫していたのです。ここ2～3年改めて手書き入力をもう一度もっと便利に使えるようにということで、今、子どもたちに渡しているタブレットは全て手書き入力ができる仕組みになっていますので、紙のノートに鉛筆で字を書くことをしながら、一方でタブレットに手書きで入力していくというようなこと、行ったり来たりをしながら大事な部分をなくさないようにしていく必要がある。現場もそういう認識でやっていますので、ぜひ

その辺は大事にしていきたいと思います。

区長 私もそうなのですが、字が下手な人間にとっては便利な機械で、ちゃんと活字ができて誰にも見せられるという、何か頭がよくなった気になるような人もいないわけじゃないかもしれないけれども、確かに便利だと。だけど、反面、自分で常に書いていると覚えておくわけですけど、知らない間に、読めばわかるのですけど、書こうと思うと出てこなくなってしまう、簡単な漢字が。というのが、少し年をとってきたからそう感じるのかもしれないけれども、やっぱり日本語にしる英語にしる、子どものうちからやっぱり書く習慣というのを一定程度これはやったほうがいいのかという気がちょっとしました。特に思春期になると、例えばラブレターを書こうかなとか思う、それは男の子も。ラブレターを書こうと思ったときにワープロで書くという感覚になるのかな。やっぱり手書きで、心を込めて……。

對馬委員ほか LINEですね。

区長 LINEですか、今そういう時代ですか。そこからもう古いタイプの人間になってしまっているのですけど。じゃあ、やめましょう、この話は。

對馬委員 字が上手か下手かと、私もすごく、さっき区長がおっしゃったデータがあったらおもしろいなと思ったのですけど、子どもたちに与えているタブレットの中に文字を練習するのがあるのですね、漢字の練習とか。あれは結構厳しい。書き順もだし、とめとかはらいとかがものすごく厳しくて、優しい先生だったら丸つけてもらえるなどいうのを結構丸くなくて、やり直しとかブーとか言われるので、結構字を書くという点では、あのタブレットのほうが厳しいかもしれないと私は実は思っています。

折井委員 息子は今、現在進行形で漢字を一生懸命習っていて、1年生のときの漢字よりも2年生になるとぐっと個数もふえますし、画数もふえて今、四苦八苦してしまっていて、先日の保護者会でもとにかく漢字の話ばかり出ていたのですけれども、今、日々の宿題を見ていますと、漢字ドリル、漢字ドリルノート、それから普通にノートに書いていくというので結構回数は書いているのかなと。プリントも豊富に配っていただいて、それを宿題として出しているの、正直私の子どものころよりもしっかり練習させてもらっているのかなという気がします。

タブレットが厳しいというのは私も聞いたことはあるのですが、ただ一方で、筆圧の問題があって、うちの息子がそうなのですが、ちょっと筆圧が弱いのですね。ちょっと力が抜けた字を書くのですけれども、それがきちんと筆圧を適度にできるようになるのも、やはり手のトレーニングだと思いますので、タブレットで厳しく見てもらいつつ、きちんと字が書けて機械に頼らないということもバランスよく、適材適所というのでしょうか、練習の仕方もうまく組み合わせてやっていくと子どもたち、漢字をいっぱい覚えてくれるのではないかなというふうに思いました。

区長 あと教育委員の皆さんのお話の中で、伊井委員でしたでしょうか、中中連携という様におっしゃっていましたよね。後でお話ししようと思っけていますけれども、次世代育成基金というのをつくって、いろいろな交流事業を小中学校の児童生徒さんたちに機会をつくっていると。最初に行ったのは中学生の野球交流で台湾の皆さんや南相馬市の皆さんとでしたね。今もそれは続けているわけですけども。

懇親会のときなどで、それぞれ何か芸を披露するじゃないですか。台湾の子どもたちというのは割と人見知りをする事なく、すぐさーっと行けるじゃないですか。台湾に限らず外国の子どもたちは割とそういう傾向があるのだろうなという印象なのですよね。それに対して日本の子どもたちというのは、自分も含めてそうだったかもしれないけれども、何となく物おじするというか、人見知りをする。仲間うちだとわいわい楽しくするのだけれども、ほかと最初に何か壁がつくられているような感じというのが、やっぱり日本人の伝統的な傾向なのかなという印象があって、例えばそれは同じ杉並の中の小学校単位とか中学校単位でも、結局、村意識というか、島国根性というか、何となくインナーとそれ以外という意識・無意識の感じというのが日本はあるじゃないですか。だから、やっぱりそういうのをオープンな形にしていくには、子どものときからほかの学校とか幼保小中という縦のこともありますが、横の垣根をなくした付き合い、接する機会を上手に増やしていくとか、そういうこともやはり日本人が世界でグローバルに活躍するという時代になったから、そういうような教育というのも若いときから必要なのかもしれないなと少し思いましたね。

教育長 区長が今ご指摘になった台湾の生徒との交流のときに、たしか私も同席していて、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのにと思いたくなる場所もありました。今、中学生の学校間の交流の話がありましたけれども、私は中学生って大したもんだなと、つまり、この子たちがこのまま大きくなってくれたら本当にいい大人になるだろうと思う、そういう場面も結構遭遇しているのです。

それは夏に、先ほどちょっと触れました中学生の生徒会サミットでいじめの問題をこの3年間話し合いをしてきているのですが、準備の段階というのは各学校の生徒会の代表であったり、いろいろな立場の代表が来て準備を進めていくのですけれども、それを指導する教員の力量も大したもので、その影響も大きいと思うのですが、でも、それ以上に子どもたちが本当に難題であるいじめの問題をどう考えていこうかという、たくさんさんの生徒を巻き込んでセッションの会場でみんなと一緒に話を進めていくことをどうやったらできるかという、あの準備の会合を見ていると、捨てたもんじゃないというか、私が中学生のころよりもはるかに人としてのキャパシティが大きいというか、こういうふうにして育っているのだなという場面も一方では見ることができます。

ですから、ご指摘のように、そういう機会をできる限りふやしてやりたい。難しい問題を考えるような場面も必要でしょうし、あるいは打ち解けてレクリエーションのような形で親しくなる場面も必要でしょうし、あるいは協力して、例えば野球のように台湾のチームやほかの自治体のチームと対抗するというような場面も必要でしょうし、できる限りいろいろな場面で自分たちが今住んでいる、あるいは生活している枠を超えて交流していく、その行き着く先に国を超えて交流していくということになるのでしょうかけれども、ぜひそういう気概とか意欲とか力を持った子どもたちに育ててほしいなと本当に思います。そういう意味では、いろいろな場面で接している中学生に物足りなさを感じることも多々ありますけれども、それと同じぐらい大したもんだなという場面もありますので、ぜひそういう子どもたちに期待をしていきたい、そんなふうにあります。

区長 ありがとうございます。さて、この間、新聞を見ていたときだったかな、PTA

の参加のことについて読者の投書欄だったのでしょうか。同じものをご覧になっていたかわかりませんが、要するに何でPTAに参加しなければならないのだと、それは強制なのかどうなのかというような記事があって、そんなことを私もそれを見るまで思ったこともなかったのだけど、それだけ家内に全部そういう役割を任せていたという傾向があるのかもしれないけど、そういうことが結構話題になったり課題になったりというようなことは杉並区の場合はあるのですか。

對馬委員 私は学校を統合するときに、やはりPTAは必要なのかというお手紙をいただきました。そこからやっぱり統合するときには、本当にそこから「PTAをつくる？」というところから相談して行って、結局「やっぱりあったほうがいいんじゃない」という結論になってPTAをつくった経緯がありますが、それぞれの方のやっぱり思いはいろいろあると思うのですけれども、多分どこの学校ももともと本当は任意なのだと思うのですよね。ただ、任意だけれども、何となく強制的に近いというか、全員入っていて当たり前みたいところがすごく強制的にと感じられる方も当然いらっしゃるでしょうし、任意なんて聞いてなかった、全員入ると思っていたというふうに思われる方も当然いらっしゃると思うのですけれども、でも、やっぱり全員入っているからこそできる活動なのかなという感じが私はやった経験からは思いますし、PTA活動ってやらされていると嫌かもしれないけれども、自分が主体的にやろうと思ったときから、やっぱりそこでしか学べないことってすごくあったなと。さっきも伊井委員とお昼を食べながらそういう話をしたのですけれども、やっぱり私がPTAをやったときに研修で、ある先生から「授業料のかからない大学だと思え」と言われて「こんなにいろんなことを言う人がいる団体はないよ。くじで外れて入った人もいれば手を挙げて来た人もいる、こんな団体はないから文句もすごく言われるよ。でも、褒めてもらえる。こんな集まりはなかなかないから、いい経験だと思ってやれ」と言われたことがあって、私は今でもすごくその言葉を忘れなくて本当にそうだなと。ストレートに厳しいことも言われますし、「あなたのおかげよ」と言ってくださる方もいらっしゃる中で、やっぱりすごくいろいろな方がいて、いろいろな希望があって、それと一緒に1年、2年過ごしていくことで学んだことって、本当にあそこでしか学べなかったことというのがすごくたくさんあったなと思うので、私はぜひかかわってみたいと思います。

区長 何かご意見あればお願いします。

折井委員 まだ小学校2年生の保護者としてPTA活動、役員ですとか係をまだやったことがない者として、正直な気持ちを述べさせてもらいたいと思います。

やはり少し怖いというのが正直なところですね。怖さの内容は、子どもたちのためになるのだということはわかっている。でも、特に働いている母親の場合には仕事と両立できるのかということがやはり大きな心配でございまして、現在はワーキングマザーが多いということで土日に活動することが多いそうなのですが、やはりそれも上の役員の方次第ということがあって、かなり効率化を考えて活動を進めていく。なので、必要でない判断したらなくしていくということの取捨選択をするタイプの方のもとで働くか、もしくは前やっていたから全部やりましょう、プラスアルファやりましょうということで「子どもたちのためになるの？」と、ちょっとはてながつくようなこととにか

くやりましょうというような活動の方法もあるということで、どのような形になるか目に見えない形、そして、そのときになってみないとわからないというところが、やはりちょっと怖さの源なのかなというふうに思います。

任意なのですかというところは、うちは委任状を全部とりますので、必ずやるということが前提なのですが、でも、基本的には、みんなで支えていくというところが本当に学校の大前提だと思いますので、できることはしたい。ただ、働いていても働いていないお母さんも基本的に子どもとの時間だとか、もしくは家事だとか、そういったものがやはり多いと思いますので、無駄のないPTA活動、子どもたちの成長のために、より直結した活動を中心にやっていったほうがいいのかというふうに思います。

次回、私ここへ参加する機会があるかどうかわかりませんが、役員をやった暁には、そのご報告もさせていただきたいというふうに思っております。

伊井委員 私は、PTAは1つの社会参加だなと思ってやっていたので、先ほど對馬委員もおっしゃったのですけれども、本当に自分がやっているときには教えられることが多くて先輩の保護者の方からどれだけのことをいただいたかなと、ご指導いただいたなと思っていて、手続から考え方から、それから区の方々とかかわりもできて、そこで本当に自分が社会を知ることの窓口だったとか、入り口だったなというふうに考えていて、一番最初は下の子を抱えながら通っていた幼稚園で「あなたは今、みんなにお世話になればいいのよ。私たちに返してくれなくても、いつかあなたがどこかに返せばいいから」と教えてくれた保護者の方、お母さんがいらして、本当に目からうろこで、自分がいただいたものをその方に返すだけではなくて、いつか誰かに返せるかもしれないというのがすごく考え方として自分の中に生きているな、子育ての根本として生きているなと思っております。それに似たような教えをたくさんの中で受けたので、PTAはまんざらでもないよというふうに思っていた方がいいのです。けれども、やはりいろいろ時間の使い方が違ってきますので、保護者の方々がどう時間を使うかというのは、それぞれの価値観にお任せするところですが、フレキシブルにすごくいろいろな形を今のPTAの方々も考え始めていると思うので、ぜひ学校に対して一緒に子どもを育てていく仲間といいますか、そんなふうに学校とともに歩んでいただけるとうれしいなと思っております。

区長 ありがとうございます。学校というところは生徒がいて、先生がいて、保護者がいて、地域の方がいて「いいまちはいい学校を育てる。学校づくりはまちづくり」、そういうスローガンで杉並区は取り組んできているわけですが、それぞれの立場で当事者意識をしっかりと持ってかかわることが非常に大事なことになるだろうと改めて思いました。

そういう意味では、学校をよくしていくということが地域をよくしていくのだということの理念につながっているわけで、学校選択制というのはもう完全にやめているのでしたかね。あのときはあのときのいろいろな判断があったのでしょうけれども、やはりこの学校はいろいろ問題があると思ったときに、そこから逃げずに地域の人、また当事者がどうよくしていくかということを背負うということが、やはり民主主義というのはそういうものの積み重ねなのではないかなというふうに思います。そういう意味で、今

後そういう機運を全区的に醸成していければうれしいなと思います。

ところで、先ほどちょっと触れましたけれども、杉並区では次世代育成基金を設置して次代を担う子どもの育成支援をしていこうということで、平成24年度から27年度末までに通算で約6,400万円のご寄附をいただいているわけです。自然、文化、芸術、スポーツ、さまざまな分野における体験交流事業の参加を通じて子どもたちの視野を広げてそれぞれの将来の夢に向かって健やかに成長できるよう支援するための区独自の取組でございます。平成24年度より区交流自治体の児童との交流やウィロビー市への海外留学、またチャレンジアスリート事業等に基金を活用しております。私も同行をしたことがございますが、小笠原自然体験交流、これもその1つでありまして、この事業を通じて実際に杉並の子どもたちと教育委員の皆さんも参加をしていただいているので、ちょっとその感想というか、成果や子どもたちの意識など感じられたことをお話しただけだと思いますが、いかがでしょうか。

對馬委員 では、私は、昨年度は台湾へ、区長とも1泊ご一緒でしたけれども、台湾へ行きました。その前の年には小笠原に行かせていただきました。小笠原のほうは船に乗ってしまえば1週間帰れないというところで、事前学習をして行って、事前学習をしている間はまだ子どもたちも何か緊張感があるのですね。ちょっとおとなしめな、あんまり意見も言えたり言えなかったり。船に乗ったときにやっぱり顔が変わりまして、ここでみんなこの共同体で行くしかないというか、そういう部分が子どもの中にもあったのかなというのと、船が何しろ長いものですから、子どもとその間に話をたくさんすることができまして、本当に中学生ってなかなかしっかりしているとか、こういうちょっとまだ幼い部分もあるとかいろいろなことを感じながら現地に行きまして、現地の方々や向こうの中学生ともたくさん、私が行ったときは、今年の伊井委員が行ったときよりも1日長かったので現地の中学校への訪問もできましたし、非常にゆったりと現地で過ごすことができました、本当にこっちで流れている時間と全く違う時間を、現地だと3泊4日ですけれども、もちろん景色も全然違うのですけれども、非常にやっぱり違う時を過ごすことができました。

それは中学生たち自身がやっぱりそういうことをきちっと感じてくれまして、今の中学生たち、結構豊かなと言いますか、例えば毎年沖縄に行っているとかハワイに行ったことがあるとかいう子もいたのですけれども、そういう子たちが帰りの船で「ハワイとか沖縄というのはやっぱり何かつくられている気がする」と言ったのです。「小笠原はそうじゃなかったよね」と。要するに自然を残そうとしているか、お金もうけといたらあれですけど、ある程度人工的になっているかということや彼らはちゃんと判断できて、自然を残そうとしていることがいかに大事なことなのかということを経験できたのかなと。それを帰ってきて成果報告会をするわけですけれども、その後やはり中学生というのはまだ幼いですが、今年高校生になった子も何人かいて、面接のときなんかには自信を持って小笠原のときの経験を言えたから合格できたのではないかと思うというようなことを言ってくれた子もいたのですが、そういうところに生かすことはありますけれども、やっぱり彼らが成人になったときに、やっぱり次世代として杉並区に何をしてくれるかというのが今すごく私は期待しているところですし、そういった道を私たちもちゃんとつけていかなければいけないかなと思います。

台湾の野球交流のほうはまたちょっと感じが違って、野球を一生懸命やっていてセレクションに合格したという子たちですので、行く途中に感じたことは「台湾に行きたいとか海外に行きたいとかじゃなくて、野球をやりたいんだな、この子たちは」ということを実はすごく感じました。だから、相手が誰であれ、とにかく野球をやりたい子たちなのだというのがすごくあったのですけれども、やっぱりこちらのほうは羽田から南相馬の子が一緒でしたし、それから現地で名寄の子が一緒になって、そして向こうの台湾の子たちと交流をするということで、南相馬や名寄の子たちとは初めてですが、日本語が通じますので、これは割とすぐに打ち解けて仲よくなっていました。

すごく不思議だったのは、現地の子たちは基本的に中国語で、こちらの子たちは日本語で、多分ウィロビーに行く子たちと違って英語とかもあんまり得意じゃありません。「英語できるの？」と言えば「いや、僕だめです」みたいな子もいっぱいいたのですが、すごく交流はできている。とても不思議なことに、どうやって交流しているのと。3回夕食の食事会がありますと、1日目は緊張していても2日目ぐらいにはかなり打ち解けていて、野球をやりながらまた打ち解けてというのがあって「どうやって話ししているの」と言ったら「わかんないけど、何かにこに手を振っているとみんな集まってきて写真撮ろうとかLINE交換しようってなるんだよ」というような感じで、向こうもいろいろ協力してくださって名刺みたいなのをつくったりとかいろいろなことをしてくださったのですが、子どもたち同士持っているツールの中で国際交流というか、できるのだなど。

もう1つびっくりしたのは、帰ってきて彼らの作文の中に今でも時々電話をしているとかLINEやメールを交換しているって、どうやって電話しているのだろうかとすごく不思議なのですが、何かやっぱり通じるものを、同じ野球というものを通して何か友達ができたなという実感は中学生の中にはちゃんとあったのだなというのは非常に良かったかなと。

非常におもてなしをとめてくださる国ですよ、台湾の方たちが。それはとても子どもたちには居心地が良かったのか、最後、区役所の前に夜の10時半ぐらい、年末の12月28日の夜10時半ぐらいにバスが着いて誰もいないようなところで「シェイ、シェイ」騒いでいて「このまま私、留学できる」とか「台湾に留学したい」とかいう声上がるぐらいすごく大好きになって帰ってきていて、そういう柔軟なときに海外を経験できた子たちというのは、やっぱり少しずつでも国際的な感覚というか、日本人じゃない人が世の中に、地球上にいるということはとても実感できたのかなと感じております。もうちょっとまちの見学とか、そういう少し自由なというか、そういう時間がもうちょっとあったら、もっと良かったなと思いますが、とても有効な交流はしてこられたかなと感じております。

区長 では、順番に。伊井委員お願いします。

伊井委員 今年小笠原に行かせていただきました。本当にちょっと自分の今までの常識が覆されるような本当に旅行観というか、自然観というか、人生観そのものが少し私の中で変わったぐらいインパクトのある子どもたちとの派遣団の行程だったのですけれども、とにかく大自然もそうですし、あちらのあったかい人々もそうなのですけれども、命と

いうことをすごくいろいろな場面というか、いろいろな角度から感じることでできた日々だったなと思っています。

まず25時間半、行きにぐあいの悪くなる子もいますし、でも、帰りは結構平気だったりとか、子どもの変化ということもさることながら、まずはあのプログラムにされたことを、どういうふうに調べてあのプログラムにされたか、本当にあのプログラムにされるまでのご苦労というのはいかばかりだったかなと思うぐらい本当に充実したプログラムでした。

先生方の本当にご尽力とか、それから、子どもたちへの対応の仕方というのは本当にすごくて、派遣生たちのそれぞれの成長はすごかったのですけれども、まず先生方が信じて期待して、期待されている自覚がすごく大事だと思うのですけれども、それを成長につなげるエネルギーって一体どこにあるのだらうと思ってずっと観察していると、生徒たち同士の何気ない会話とかリアクションの中にもしかしたらあるのかもしれないかなと思って、その導き方は、ある意味子どもを育ててくださる先生方の投げかけるヒントであったり言葉がけであったり、そういうところから細かく受けとめていきながら、今度はそれを力へ変えていくあたりというのは、先生方の言葉がけも大事なわけけれども、子ども同士のリアクションというか、成長し合っているのですか、大人に褒められて伸びていく、だけど、お互いに感想を言ったり褒め合ったり認め合って、さらに伸びていく生徒たち同士の響き合いというか、育ち合いというのでしょうか、それにとっても可能性を感じました。私なんかは適切なヒントを投げかけることはなかなかハードル高いのですけれども、これからもその子どもたちの可能性を信じて楽しみに熟成するのを待ちながら見守って応援していきたいと思っています。

ぜひ今度はその子どもたちがどう成長して、どう次世代の子どもたちが、例えばこの小笠原のプログラム、台湾のプログラム、そして名寄のプログラムを含め、杉並の教育に戻ってきてくれる姿というのをすごく楽しみにしながら、ぜひ今後も続けていただけたらありがたいかなと思っています。ありがとうございました。

区長 折井委員、お願いします。

折井委員 私は、小学生の名寄自然体験交流、2年連続で行ってまいりました。ですので、子どもたち側のことではなくて今回プログラムをつくるという観点から少しお話をさせていただきたいと思います。

2年連続で行ってまいりまして一部の引率の方は共通だったのですけれども、連続で行って、とてもよかったなと思いますのは、プログラムが進化しているのだということを実感することができたことです。

初年度行ったときも本当に現地の方々の大きなサポートと、そして、こちら現地のお留守番部隊というのでしょうか、事務局がいろいろと支えながら、そして現地で引率団が生徒の指導に当たるということだったのですけれども、初年度はとてもトラブルが多くて健康上の問題を抱える生徒さんですとか、その部分はとても大変だったのですが、プログラム自体は非常によく練られていて盛りだくさんだったなというふうに感じました。

ですので、2年目は病気のお子さんが出ないといいなと願いつつ、でもプログラムは

基本的に同じなのかなというふうに思ったのですけれども、大筋では確かに同じだったのですが、細かな配慮ですとか、例えばカーリングのときには現地の中学生の人に指導してもらおうといったような活動が新たに加わり、そこでまた交流が行われるですとか、そういった形で非常によりよくしていこう、プログラムをどうしたら進化させることができるかというところを非常によく考えてくださっていて、それが成果として今後につながっていくのではないかなというふうに思いました。

先ほど伊井委員がお話しされましたように、小小連携、中中連携、この自然体験交流ほどそれに適切なものはないのかなと。何かを体験することを通じて仲よくなるということにまさる、仲よくなる方法はないなというふうに思いました。名寄の場合には同窓会のようなものができているというふうに聞いたことがあります。全部の年ではないかもしれないのですけれども、そこで交流を続けているということですので、1つ大きな力になるのではないかなというふうに思います。

ちょっと話が飛んでしまうのですけれども、例えば校内で自分の、今いる環境の中で煮詰まってしまった、人間関係がうまくいかなくなってしまったといったときに、もちろん家庭が大きな支えになると思うのですが、同年代の子で自分の環境にいない、少し離れた環境にいるからこそ相談できる、もしくは自分のつらさを出すことができるといったような、そんな仲間が区内に学校の外にいると子どもたちにとって精神的な面から大きな支えになるのではないかなというふうに思います。そういった子どもたちの精神的な安定ですとか、もしくは成長のためにも、このような自然体験交流は非常に有効なことなのではないかなというふうに感じております。以上です。

区長 ありがとうございます。今いろいろご意見の中で、一度参加した生徒さんのその後、卒業以降の。初年度と2年目ぐらいは区側の担当者に人事異動がなかったので、時々遊びに来ていた生徒さんもいたように思いますけど、その後何か動きがあればというか、何か把握している状況があればお聞かせいただきたいのですが、では教育長から。

教育長 小笠原の1期生が今年、大学に入りまして、その大学を選ぶきっかけが小笠原に派遣されて、1週間寝食をともにしていろいろな大きな影響を受けた、引率のスタッフから。具体的には、科学教育を専攻する学部に進学したのですが、そのきっかけが大きくなったらこういう仕事をしたい、学校で先生になって教えるということ、小さく言えばそういうことですけれども、広く子どもたちを育てる、科学教育を通して子どもたちを育てる、そういう仕事につきたいということで大学をそういう観点から選んだと。その選ぶときに1期生を引率していった担当の指導主事に相談をして、それはこういうふうになれば大丈夫だということで非常に安心して受験をして、合格をして、受かったことを報告しがてら、出会ったときに、ぜひ学生になって力がついたら、こういった事業をお手伝いさせてほしい、そんな話をしたという大変うれしい話があります。

それから私のところによく手紙をくれる、やっぱりこれは小笠原の1期生の女の子なののですけれども、大きくなったら外交官になりたいと言っていた子なののですが、まだ外交官の芽も出ていないのですけれども、自分たちが高校生に入ったら杉並区の高校生として杉並区のいろいろな仕事、彼女いわく仕事というのですけど事業ですね。そういうお手伝いをするのをやってみたい。それから学生になったら具体的な地域の活動なん

かにもかかわるようなこともやってみたい。「区長に手紙を書きたいんだけど、書いたら読んでくれるかな」と言うから「書けば読んでくれるから書いてみなさい」と今そのかしているところなのですけれども、そんな子も出てきています。

それから、今年ウィロビーに派遣した子どもたちがマイシティ杉並、アワーシティ杉並だったか、ちょっと忘れましたが、英語で自分たちの杉並区を紹介する冊子をつくりました。阿波おどりであるとか阿佐ヶ谷の七夕であるとか善福寺の桜であるとか、大宮八幡の行事であるとか、いろいろなことを選んで杉並区を英語で紹介する。多分これは、これからオリパラの教育の中で国際交流のようなことを取り上げてくる機会が多くなると思うのですけれども、自分たちが経験したことをもとに自分たちのことを相手に伝える、日本人が一番苦手になっている、英語が使えるけど、自分たちのことをちゃんと伝えることができない、なかんずく自分の国のこととか歴史であるとかふるさとのことであるとか、そういうことが苦手だということは指摘を受けているわけなのですが、この子たちがつくった冊子を見ると、指導は受けてはいますけれども、一生懸命拙い英語で自分たちのふるさとを説明しようとした痕跡を見ることができて、本当に力強いなという感じがします。ぜひこういう自分たちの経験を区の施策に子どもなりに反映させていくことができれば、それはそれで大変すばらしいことですので、そういう受け皿もつくっていったらいいし、先ほどから話題になっているように大人になったら今度は次世代育成基金を支える側になってくれれば、またもっとありがたい話ですし、そうならないまでも次に続く子どもたちの指導に当たってくれるような、そんな大人になってくれれば本当にうれしいなというふうに感じます。

区長 ありがとうございます。ウィロビーもいいところだし、ただ、ウィロビーに行くより日本の国内である小笠原に行くほうが時間かかるので、これもまた現実はおもしろいわけなのですが、船中2泊なので飛行機で移動しているときはずっとエコノミーの座席に縛りつけられているわけですが、船の場合は比較的ゆっくりだし、逃げるところもないわけで。小笠原というのは本当に自然の原形が残っているところだから、ああいうところへ行くと現実自分が日々いる中で悩んでいるようなこととか気にかけていることが小さく見えるというか、公債費負担比率がどうだとか、経常収支比率がどうだとか、これも大事なことのだけれども、選挙がどうだとか、政党の支持率がどうだとか、それも大事なことのだけれども、ああいうところへ行くとまた違う世界、異次元の世界で心が洗われるというか、世界観、自然観というお話もありましたけれども、自分自身を見つめ直して自分の目標をきちっと見定めていくという機会にもなるのではないかなというふうに思います。

いずれにしても区民の皆さんの理解を得つつ、その原資となるご寄附も募りつつ、その量によって事業規模の幅も決まってくるという事業でもありますので、しっかり事業を実施し、かつ上手に区民の皆さんにPRをするということも大事な事かなと思っていますので、事務局もひとつよろしくお願ひしたいと思います。

さて、そろそろ時間も3時近くなってきたので、本日の会議を閉めたいと思うわけですが、ほかになければと思いますが、よろしいでしょうか。

では、事務局から何か連絡事項があればお願いします。

総務課長 会議録の作成についてご案内をさせていただきます。

本日の会議録はホームページにおいて公開する予定となっておりますので、後日委員の皆様には内容を確認していただいた後に、区長及び教育長から署名をいただいて公開ということになってまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

私のほうからは以上でございます。

区長 本日はご参集をいただきまして、まことにありがとうございました。

本日の会議では平成27年度の取組と成果及び平成28年度の教育委員会の取組について確認をすることができました。また区と教育委員会が協力して取り組んでいくべき課題が非常に多いということも確認できまして、共通の認識が図られた貴重な機会になったものと思います。

昨年度もこの場で申し上げましたが、私は教育行政については、教育の専門家である教育長や教育委員が中心となって教育行政を推し進めることが杉並区の教育にとり一番望ましい姿であるという考えに変わりはありません。

ただし、危機管理上の問題などが発生したときには首長としてリーダーシップをとり、必要に応じて対応していかなければならないと思っておりますので、教育委員会だけでは解決できない事案があった場合には、この会議を活用するなど区としても必要な支援に努めてまいりたいと考えておりますので、重大な問題等が発生したときには機を逸することなく情報の共有ということをぜひお願いしたいと思っております。

さて、去年は改正された地方教育行政の組織及び運営に関する法律が施行され、さまざまな教育委員会制度改革が行われた中で、この総合教育会議も開かれております。

この制度改革の1つとして教育委員の任期の特例がございます。これは教育の政治的中立性・継続性等を担保するため教育委員の交代の時期が、できるだけ重なることのないよう委員の任期を1年から4年の間で調整できるという特例であります。今後、教育委員の方の選任を行う際には、私としても十分にこの制度の意味を勘案した上で、対応していきたいと思っておりますので、よろしくご了承いただきたいと思っております。

最後になりますが、区の教育の大綱と定めました教育ビジョン2012の実現に向け、区はこれからも教育委員会と力を合わせて取り組んでいく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これで本日の会議を閉会といたします。ありがとうございました。

(終)